

Principal Correspondence

卒業にむけて



第1回卒業生から贈ってきた言葉を、第14回卒業生にも贈ります。

日本では不吉なことを言うことを忌み嫌う伝統があり、例えば結婚式で「終わる、閉じる」などとは言わないのですが、西欧圏では、結婚式で牧師が必ず「汝、健やかなる時も、病める時も、ともに手を携え助け合い・・・」とはっきり危機を口にして覚悟をさせる伝統になっています。日本では、危機の際に決断できず、誰も責任を取らずといった、曖昧な姿勢になる場面をしばしば見受けますが、現代日本ではもう許されないことでしょう。

今日贈る言葉は、英国の精神がはっきりと示されている100年近く前の英国のパブリック・スクール校長の卒業にあたっての言葉です。日本ではおそらくこういう祝辞は無いでしょうが、当校の精神と合致するゆえ私は敢えて卒業生に贈りたいと思います。100年近く前の英国は、女性は入学できなかった時代なので男児向けに贈られた言葉になっていますが、それを含んで読んでください。

この度、学窓を出る諸君が揃って立派な人間になることは理想であるが、今日の社会ではまだそのような事は到底望めない。志を得るもの、然らざるもの、社会が諸君を遇する道は千差万別であろうが、諸君の母校が諸君を遇する道は常に同じく、大臣、大将、僧正、社長、腰弁、巡査、兵卒、郵便脚夫、いずれの諸君をも喜び迎える校門の広さに差別は無い。

一つのクラスがそのまま社会の縮図である以上、あるいは諸君の中から刑法を犯した罪人がでるかも知れない。男らしく己の非を認めて潔く規定の服罪を済ませた後は、彼とても母校は喜んで迎えるであろう。ただその然らざるもの、罪を犯して逃れんとするもの、罪を他に転じて一人免れんとするものに対しては、母校の鉄門は永久に開かずの門であることを承知すべし。(自由と規律・池田潔著より)

「自立」「創造」「リーダーシップ」

このリリーベールでこれからの人生で役立つ大事なものを、たつぷりと学ばれた卒業生の皆さんは、大きくなったら社会の最先端となって活躍してください。ご両親や先生をはじめとする多くの人からいただいた「ご恩」や「愛情」は、大きくなったら今度はみなさんが社会にお返ししてください。

風よ 光よ 空翔る雲よ この子らに祝福あれ

ご卒業おめでとうございます

Principal Correspondence

学童クラブ卒業の皆さんへ

学童クラブ卒業のみなさん、いよいよお別れですね。長い人では幼稚園から9年。保育園の人は今までの人生丸ごと12年もリリーに通ってくれました。高学年として小さい子の面倒を良く見てくれてありがとう。

そこで先生から、これから幸せな人生を送っていくためのアドバイスを贈ります。

多くの雑用を喜んで上手にこなす人になりなさい。

人生は雑用の繰り返しです。

毎日の雑用の果てに幸せがある。人はおいしい果実だけをつまむことはできません。



脳科学者の茂木健一郎博士がどこかで言っていました。

あのアインシュタイン博士でさえ、研究に没頭できた時期より、雑用をこなさねばならないときのほうがはるかに多くの発見をした。細かな雑用を粘り強く、精度高くこなすことで、どんなことでも持続して成果を出す脳の耐性ができる。



フランスの哲学者のアンドレ・ジッドがこう言っています。幸せは「リベルテ（自由）」の中ではなく「デボワール（義務）」の中にある。人の幸せはしなければならないことを受け入れる中にある。

難しいですね？今わからなくともきっとわかる時が来ます。



See you again.

頑張れ学童クラブ卒業生。世界は君を待っている！

